28　板谷波山　葆光白磁枇杷彫文花瓶　一点

昭和三年（一九二八）　陶磁

径二六・七　高一九・三

板谷波山（一八七二～一九六三）は様々な図案の研究に加え、木彫出身の技術を生かした器体表面へのレリーフ（浮彫）の巧みさにより、わが国の近代陶磁に画期を築いた際立った個性を持つ陶芸家である。本作は張りのある胴部の周囲に枝葉とともに枇杷の房を豊かに彫り表した白磁の上に、波山の創始した葆光釉と呼ばれる失透性のマット釉を用いた作品である。大正から昭和初期にかけての陶磁作品には、波山の作品を筆頭に同様の失透性のマット釉を用いた作品が数多く見られ、この技法がひとつの流行であった。そのなかにあって波山の優れた点は、植物写生及び幅広い資料収集を裏付けとする他の追随を許さない図案の完成度、そして葆光釉により幻想的な仕上がりとなる緻密に彫り上げたレリーフに見られ、欧米のアール・ヌーヴォー様式を当時もっとも的確かつ柔軟に受容し作品化した作家であったと言えるであろう。

本作は昭和三年九月の秩父宮雍仁親王の御結婚に際して、東京府よりもう一点の波山による「氷華磁牡丹彫文花瓶」と、香取秀真、津田大壽の作品とともに秩父宮家へ献上された。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸
三の丸尚蔵館展覧会図録No.50

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections